

すべて譲った。

若い者の経営意欲をなくさないようにと、できるだけの事はして渡したので満足している。妻にも、熊が出るような未開の原野に連れて来て随分苦労をさせたが、よくついてきてくれたものと深く感謝している。

平成十四（二〇〇二）年二月十六日には、子供夫婦十人と孫十一人が集まって、川湯グランドホテルで私たち夫婦の金婚式を祝ってくれた。

現在は老妻と共にゲートボールで体を動かし、下手な短歌や俳句で呆け防止に努めて悠々と余生を過ごし、平和の喜びに浸っている。

○満蒙に抱きし夢も虹と消え

戦禍に散りし拓友そ悲しき

○牛と共楽農目指し五十年

夢に向かつて歩み続けり

○北の町大地自然を師となして

誇りを持って農に一生

旅を経て、裸同然で故国の土を踏んだのです。幸いにも、主人は二年八カ月のシベリア抑留から無事帰国しましたが、この戦争による犠牲者として、何よりも世界の平和を共々願っております。

常々、自分自身の八十余年の人生で辛酸をなめた「敗戦引揚逃避」という他に類を見ない体験を、何かの形にまとめてみたいと考えておりましたところ、このたび引揚者団体全国連合会が引揚労苦体験記録を募集していることを知りました。この機会に「自分史」として書きつづり、併せて次の世代の人々に語り継ぐことを願い、筆を執ることに致しました。周囲の方々にご指導、ご助言を頂戴しながら書き記してみたい次第です。

生い立ちと渡満の動機

私は大正十二（一九二三）年十二月十五日長野県飯山市豊郷で、父小林源吉、母はなどの間に長女として生まれ、妹一人弟一人の家族でした。生家は水田一町歩弱、畑三反歩を耕作、当時馬を飼う農家は大農といい、我が家でも馬を飼い稗を飼

死線を越えて！

北海道 高橋 みつ子

はじめに

日本が戦争に負けたために起こされた、あの悲劇。それは今から六十年も前のことです。それは、満州に住んでいた開拓団をはじめとする多くの日本人が、悲惨極まりない引揚避難の労苦を強いられたことで、これを体験した私は命ある限り決して忘れることができません。筆舌に尽くし難い忌まわしいあの惨状は、これを体験した人のみが知る悪夢のような出来事だったので。そして、戦争の残酷さを身をもって体験した人類が、今もって世界の各地で戦火を交えていることの愚かしさは、誠に悲しいことです。

主人は戦争末期に召集され、北満のチチハルで敗戦を迎え、拳げ句の果てにシベリアに抑留され、残された家族は着の身着のまま一年有余の避難の料に作り、春夏秋には養蚕も手掛ける中規模農家で、昭和初期の農村恐慌にもあまり苦労しなかつたようでした。

私は小学校高等科を卒業し、青年学校本科三年、同研究科一年を修学卒業し、女子青年団員となり養蚕指導員の勉強をしながら、とりあえず家の農作業を手伝う日常でした。

そのうちに、奉仕活動で出征兵士の見送りの手伝いなどしていましたが、勤労奉仕という名目で、五人ほどで紡績工場の使役を命じられました。仕事は一カ月の予定なのですが、冬場だから春まで働いてもいいなと思っていましたのに、一週間も経たないうちに、父から結婚のことで話があるから家に帰るように言われました。実は前にも結婚の話があり、満州にも興味はありましたが、まだ年が若過ぎるので結婚に関心はなく、帰るつもりはありませんでした。しかし、学校の校長先生や地区の名士の方々が、「あの娘は元気が良いし体も丈夫だ」と思っけて勧めて下さった話のようで、

父は「泣くほど嫌なら……」と言いながらも説教は続きました。しばらく無言でいると、承知したものと受け取られてしまいました。あとで聞いたのですが、今満州へ嫁に行けば、大層な支度はいらず着の身着のままでもいいから、という事情があったようです。母は「村の皆さんに認められて行くんだから、これで良かったんだよ」と言いました。遠い満州へ嫁げば親の面倒はみられません、経済的な負担を軽くできるのも親孝行になるのではと考え、承諾しました。

結婚の相手は、満州開拓義勇隊員として渡満している人で、二カ月ほどの日程で嫁探しに帰郷していました。その人とは話をしたこともありませんでした。学校に通う道が同じだったので顔は知っていましたし、満州へ行ったことも知っていました。特別関心があったわけではありませんでした。その方の家庭は裕福で、本人がどうしても満州へ行きたいと言いつつ、両親は「田を一町歩、畑を一町歩に、家も建ててやるから行

慌ただしい中に結婚の話が決まり、昭和十七（一九四二）年十二月十六日に式を挙げました。式が終わると、主人は一日も早く満州へ戻りたくて、一週間後には飯山の戸狩駅を発ちました。「せめて、正月くらいは内地で過ごしてから出発したらよいのに」と引き止められましたが、それを振り切って早々に故郷をあとにしました。駅には村の人たちが大勢見送りに来て、楽隊の演奏もあり賑やかなものでした。

故郷を発ち汽車は下関へ、それから連絡船で釜山に上陸、朝鮮半島を北上し満州国に入り、新京、ハルビンを経由、途中何泊かしましたが、場所の記憶もなく訥河駅に着き、そこで一泊して団のトラックで錫英地区に到着したのは、正月直前の二十五日でした。

南英開拓団での生活

はげ山が多かった朝鮮半島から満州に入った途端、あまりの広さに驚きとはちよつと違う感動を覚えました。長野県のように山だらけの所の者に

かないでくれ」と引き止めました。それでも行くと言いつつ、「千曲川に入って死んでしまえ！」とまで言われたそうですが、それを押し切って義勇隊に応募して満州へ行ったそうです。親があれだけ反対するのに、どうして満州へ行く気になったのだろうか、地元の人たちも皆一様に驚いたそうです。その当時、長野県からも開拓移民として多くの人が渡満していましたが、満州は広く平らで大農業ができる所だと話を聞かされたからでしょう。

満州から一時帰国していたのは嫁さん探しのこともありましたが、一緒に渡満した隣家の人が病気で帰郷していて療養中に死亡し、その葬儀に参列することも理由の一つでした。その葬儀のときに弔辞を読んだ人が結婚の相手となる人でしたが、その立派な態度振る舞いに地元名士や校長先生、お寺の住職さんたちが感心し、この青年が満州に帰るまでに何とか良い相手を娶らせようと奔走して、白羽の矢を立てられたのが私だったので。

は、想像もできないことでした。しかし車窓からの風景では至る所に土饅頭が見られ、これは何だろうと不思議に思いましたが、あれは墓所だと聞かされ、所変われば風習も変わるものだと感じました。

私たち夫婦が生活した開拓団は、満州国黒龍江省訥河県南英義勇隊開拓団という所です。主人は、昭和十三年に義勇隊に入り三カ年の訓練を終えて、ここ南英の地に入植したのが昭和十六年八月だったそうです。チチハルの北方百五十キロメートルにある、訥河という県公署所在地に近い錫英地区の南なので南英と称していました。

主人たちの班は六人の共同小屋生活で、私たちは夫婦のほかは五人共まだ若い独身者でした。女性は私だけなので当初は炊事当番をしましたが、あとで一戸建ての住居に移り、異国の地で夫婦水入らずの暮らしになりました。

開拓団の生活は、団本部から支給される月々五円の手当のほか、米、みそ、しょうゆなど主なもの

のは配給されました。乳牛は団本部で牛飼いで専門の特異な人たちが搾乳して、搾った牛乳は無償で頂くことができました。そのほか我が家の現金収入は、豚の販売代金でした。

現地の満人との交流はほとんどありませんでしたが、団本部で働いていた王さんは住まいが近所だったので付き合っていました。団が経営する大豆から油を絞る豆油工場や、澱粉工場、製粉工場、煉瓦工場では大勢の満人が働いていましたが、付き合いをすることもなく、交際からのトラブルや感情のもつれなどはありませんでした。元々、南英開拓団は、自作農業を目標にして耕作を進めてきたので満人を雇うことや小作させることもなく、もちろん満人部落もなかったのです。

団の営農方針は、団員を幾つかの班に分け、一つの班は五、六人で構成しました。私たちは六人で班を作り、共同で農作業をやりました。耕作の使役用の馬（小型馬）と役牛を五、六頭飼育しており、作物は大豆、燕麦、馬鈴薯などで、収穫し

たものは団本部に出荷しました。土地は一戸二十町歩が配分されることは伝えられていましたが、当時は共用中であり自分の配当はまだ決まっていませんでした。日本馬は体が大きくて使いにくく、体格が小型の満馬は作業が上手で使い易く、体の大きな役牛は荷物運搬などで大変重宝しました。

開拓団では豆油工場、澱粉工場（緑豆麵など製造）、製粉工場、煉瓦工場などを経営していて、各工場の利益は団員に配分、支給されていきましたので、団員は恵まれた生活を営んでいました。日常生活用品は団本部で手に入りましたが、ときには三十キロメートル離れた訥河まで買い物に行くこともあり、団のトラックで往復しましたが、運賃は無料でした。こんな幸福な生活の中で昭和十九年五月に長男が生まれ、満一歳のころになると言葉が話せるようになり、かわいらしさが増してきました。

終戦の一年ほど前から、団員に次々と召集令状

がきて男性が少なくなりました。そこへ沖縄から五十人くらいの補充団員が入植しました、この人たちの中からも召集される人がいました。それでも終戦直前に退避するときには、この補充団員の

でしようが、残された私もこの先どう暮らしていけばよいのか考えもつかず、初めて戦争の様子がただならないことを感じました。

退避、終戦、避難の状況

男性が残っていて心強く思いました。補充入植の団員には空き家になっている共同住宅に住んでもらいましたが、このころになると所帯を持つ人も増えてきたので、個人住宅を新築して入居してもらいようになりました。団員はまだ年が若く独身者が多かったため、徴兵などで在団者が減り、二十年になるとさらに召集者が増えましたが、団長と幹部、そして主人ともう一人の団員は召集されませんでした。恐らく団のまとめ役として残されたものと思っておりましたが、六月になると遂に主人にも召集令状が届き、団長と一緒に出征しました。主人は、以前に教育召集とかで一度入隊し、

ソ連と戦争になったと聞かされた直後、戦況逼迫のためか、「一時的に避難するから当座の食糧、着替え、子供のおむつなどを持ち団本部に集まること」という指示が伝えられたのが、八月十日過ぎのことだったと思います。どういふことか真意が分からないまま、急いで荷物をまとめた私たちの班は、その日の夜に団本部に集まりましたが、本部から遠い部落の人たちは集合に時間が掛かり、四十六人全員の集結が完了したのは翌朝になってからでした。

任期を終えて除隊したのだから、まさか召集があるとは思っていませんでした。妻と一歳になった長男を残して戦地に向かう主人は心残りだった

早速訥河に向かって出発しましたが、そのときには補充入植者の中でわずかに残っていた男性たちが馬車を仕立て、子供、病弱者、荷物を載せて、南英開拓団をあとにしたのです。再びこの地に戻れないことを知らぬままに……。

訥河までの途中に河があり、いくつもの橋が架かっていましたが、二、三日前の大雨で増水して、私たちが渡り終えたところで橋が落ちて、危うく流されるところでした。幸いに、後続の人たちは遅れていたため橋の手前で留まり、流されずに済みました。すぐに満系の警察署員が大勢駆けつけて、厚板や角材で応急処置をしてくれました。まだ日本が敗戦になる前だったので、このような危険な作業をしてくれたのでしょうか。橋が落ちたまま後続の人が渡れなかったら、私たちの団はそこでばらばらになってしまったかもしれないと思うと、離ればなれにならないよう助け合うことの大切さを痛感しました。

前日の雨で道路はぬかるんでいたのですが、馬車は至る所で立ち往生し、その都度皆で押し出しました。子供や病人、荷物などを護りながらの退避行でしたので、訥河に着いたのは夜遅くになりました。私たちは、取りあえず団の連絡所だった弁事処の建物に入りました。弁事処には宿泊施設があ

持ちを持つのは当然のことでしょう。同行の男の人が「この荷物をこっそり頂きましょうよ！」と言って行李を一個取り出して、私に同意を求めました。最初は「そんなことをしたら怒られるよ！」と注意しましたが、私も腹が立っていましたので、「構わないよ、持って行きな……」と言うと、ためらいながら「どうせ行く途中で襲われて盗られるかもしれないから、一個ぐらい頂いてもいいだろう」と私たちの馬車に積み込みました。私自身や、主人に着せてやりたい衣類や靴などほしいものがありました。やはり気がとがめて失敬するのは止めました。その後、その警察官一家がどうなったのか、消息は分かりませんでした。

終戦を知らされたのは八月十六日で、この訥河の避難所でした。終戦を聞いた若い人たちは「負けることはないのに……」「降伏することはないんだ……」と怒りながら盛んに息巻いていました。が、私はどうしたわけか涙も出ませんでした。

それから二日後に主人が私たちの所を尋ねあて

り、食糧も保管してありましたが、避難民全員が寝るだけの場所はなく、子供のいる人だけが屋内に泊まり、ほかの人は屋外の倉庫や物置など屋根のある場所で夜を過ごしました。二、三日は携行した食糧などで食いつなぎ、その後は弁事処にあった食糧で自分の間はひもじい思いをせずに過ごしましたが、この先どうなるのかと考えると食も働くも心配でした。日が経つと共に近隣の開拓団の人々も次々と訥河に集まり、街中が騒然としてきました。

訥河に来るまでにこんな出来事もありました。途中、ある部落の警察署を通りかかったときでした。もちろん、まだ終戦前の八月十一日か十二日ころだったと思いますが、駐在の日本人の警察官の奥さんが、山ほどの家財道具を馬車一台に積み込んで運び出すところでした。訥河まで運んで売ればお金になると考えてのことでしょうが、私たちは着の身着のまますべての財産をそのまま残してきたのですから、この有様を見て「怒り」の気

て戻って来ました。主人が召集されたころはまだ精銳関東軍の存在を信じ安心していましたが、ソ連軍との戦闘の模様や終戦当時の関東軍のうわさを聞き、主人は生きているのだろうか、果たしてこの先主人と再会できるのか……などと心配になり、最悪の事態も考えたりしました。主人の部隊はチチハルに駐屯していましたが、ソ連軍の空襲が頻繁になり、危険な状況の中で終戦と共に軍の規律もないに等しくなり、「お前たちの家族が、幸いこの近くに避難しているらしいから、そこへ帰っていいぞ」と言われ、脱走してチチハルを離れ汽車に乗ったり歩いたりして、ようやくここまでたどり着いたそうです。護身用として、またいざというときの自殺のための銃を持っていました。長男は主人の顔を忘れていたのか、よく見てやがてにっこり笑いましたが、「お母さん」と言っても

「お父さん」という言葉が生まれませんでした。

天にも昇る気持ちと喜びのうちに数日が経つにつれて、近隣開拓団の避難民が集まり大集団にな

ったため、移動することになりました。ソ連軍の飛行機が飛来して機銃掃射を受けたこともありましたが、幸い死傷者はなく、また現地人に襲撃されることもなく、治安は比較的安定していました。訥河に来て二十日近い避難生活を送りましたが、食糧、収容施設の確保が難儀になり、広い場所に移動するまで辛抱するしかありませんでした。終戦、そしてまた移動することなどで今まで暮らした開拓団の家には戻れないと感じながら、次の集結地、下学田開拓団地区の小学校に収容されて、校舎の中の倉庫で数日間を過ごしました。移動してから間もなくソ連軍があとを追ってきて駐屯しましたが、これまでの私たちの移動はソ連軍の指示によるものだったらしく、この下学田では男子と女子に分け、十六歳以上の男子はすべて連行するという話が伝えられました。せっかく主人と再会でき、これからの生活に望みをつないできたのにと、あまりにも無情なことでした。

生死の狭間、下学田で

「死」に対する恐怖感覚が全く麻痺していて、生死の判別もできなかつたときはいよいよありません。

北満の開拓団には、匪賊に襲撃されたときのために銃、手榴弾が配備されていて、終戦、退避開始と共に個人にそれらを持たせた団が多かつたらしいですが、私たちには渡されていませんでした。主人は軍隊から持ち帰った手榴弾を取り出して、「一緒に死んでやる！」と言ってくれました。しかし死を選ばざるを得なかつたのも運命ならば、これもまた運命だったのでしょうか、手にした手榴弾が爆発しなかつたのです。主人が、必死に傍らの煉瓦や石にたたきつけても爆発しませんでした。このときこの瞬間、「何故破裂しなかつたんだ。どうして死ぬことができなかったんだ。下学田の人たちは、薬を飲み火の中で死んだではないか」など頭の中ではいろいろなことが走馬灯のように駆けめぐりました。

今振り返ってみれば、思うだけで戦慄が走りま

戦後何十年か経ち、満州からの引揚げの資料を読み「昭和二十年九月五日、ソ連軍侵入により第八次下学田開拓団三十人が自決した」ことが記録に残されていることを知りました。その悲惨な事件は夢や作り話ではなく、紛れもない真実だったのです。私はその場そのときを知っているのです。その惨劇は、「ソ連兵が侵入してきたら、何をされるか分からない。敗戦国の人間が殺されずに済むとは思えない。我々は死を覚悟のうえソ連兵と戦うから、お前たちは先に死を選んでくれ」と団の幹部に言われ、団員家族が本部の倉庫に立てこもり、女、子供に眠り薬を服用させ灯油をまいて火を放ち、建物が黒煙を上げて燃えていきました。この様子を見ていた私たち夫婦も、もうこれまでと死を覚悟しました。主人がソ連兵に連行されて別れ別れにされるなら、いっそ大勢の人がいる前で死んだ方がよいと考え、どこかで一人でのたれ死にするより余程ましだと思え、「死にたい！死にたい！」と言ったのです。恐らく私は、そのと

すが、それから六十年が経ったのです。不発弾だったのは、きっと神様が「待ちなさい」と現世に呼び戻して下さったのだと思い、苦難の途を乗り越えて強く強く生きることを神様に誓いました。私たちを導いて下さった神様に感謝の思いでいっぱいです。

下学田開拓団のような自決もありましたが、女の子供が一団となって劇薬を飲んで自決した開拓団もありました。訥河から下学田に移動するときいざというときのために日本人会から劇薬の昇永二錠が渡されましたが、青酸カリのような強い毒性がなく飲んでも死にきれずに、水を求めて苦しむ人が多くいました。とにかくのどが渇くのだそう、井戸のそばに座りきりでバケツの水をがぶ飲みして、お腹の具合を悪くする人ができました。中には便所に通うため、廊下に寝る人もいました。

手榴弾で自決した女性の中には妊婦もいて、そのお腹から赤子のはみ出している様は目を覆いた

くなる惨状で、筆舌に尽くしがたいとはまさにこのことでした。また、火に包まれた倉庫から苦し紛れにはい出して、民家の裏で人目を避けて死んでいる夫婦も見掛けました。死に直面して苦しむ、このあまりにもむごたらしい姿を見て、一度死を覚悟した私も恐怖心で身も凍る思いでした。前に渡されていた昇汞錠は靴下の中に隠し持っていました。取り出して口に入れる勇氣はなく、呆然としていました。南英の仲間の人たちには、「死ななくて良かった、良かった」と言われ、主人も「別れ別れになっても、生きていれば再会できる日がくるかもしれない」と言われ、「何としても生きよう」と、私は「死の呪縛」から解き放たれた心境になりました。人間心理の勝手とはこんなものかと思いつながら、「生きる、生きたい」と改めて生きる欲望が強くなりました。人間の心は、そのときその場の環境に左右され妄動的、衝動的になり、精神の動揺からくる変化の恐ろしさをしみじみと感じるところです。

下学田で、主人を始め男子は全部ソ連兵に連行されることが現実になり、団から連れて来た荷物運搬用の牛を、哀れと思いつながら屠殺し、すき焼きで最後の晩餐会を開いて、互いの無事を祈り別れを惜しみました。男子はどこに連れて行かれるのか私たちには知らされず、心細い別れでした。また必ず会えるという希望とこれが最後の別れになるかもしれないという悲嘆に入り交じった複雑な心境で別れたものでした。後にシベリア抑留と分かりましたが、三年近く酷寒の地で健康を害しながら労役に服し、無事に帰国できたことは嬉しい限りでした。

男子がいなくなり収容施設が焼失したため、三十キロメートル離れた北学田の学校へ移ることになりました。ブロック造りの立派な建物におよそ二千人の避難民が収容され、下学田のときと同じように、訥河連絡所から馬車で持ち出した食糧でしばらく食いつなぎました。これがなくなつたころにはソ連軍から粟の配給がありました。これです。

北学田の地で昭和二十年十月二十三日、長男がジフテリアにかかり、必死の看病も空しく亡くなりました。生後一年が経って離乳食になったところでしたから、栄養不足がもとで発病したのかもかもしれません。戦争に負けなかつたら！避難生活がなければ、死ぬことはなかつたのにと悔しい思いでした。

長男の遺体は、沖繩から補充入植してきた男の人たち三人が、校舎の裏に埋葬して吊って下さいました。この人たちは、毎日のように亡くなった人の穴を掘っては埋葬してくれていました。団長さんが「今のうちに穴を掘っておかないと大変だ。凍って穴が掘れないと野っ原に放置されてしまふぞ。自分の墓穴は自分で掘っておくことだ」と冗談交じりに言うので、もうここから移動することはないのかと思いつながら、穴掘り作業をしました。

日本人は、死んで埋葬するとき子供には晴れ着

に高粱と皮付きの馬鈴薯を混ぜて炊いて食べ、避難中での一番苦しい生活状態でした。毎日、働くことはもちろんのこと、何をするともなく、ぶらぶらして一日を終えていました。たまに、仕事とも言えませんが、日本人開拓団が耕作していた大豆畑の豆刈り作業に何回か行ったことがあり、わずかでしたが労賃を頂いた記憶があります。この北学田に移動したのは、あの集団自決事件後の九月上旬で、服毒したものの一命を取り留めて治療を受けていた人たちも行動を共にしました。しかし、移動の労苦と薬物の後遺症で多くの人が次々と亡くなっていきました。また、下学田の人で主人と一緒に軍隊から脱走してきた人が、私たちと一緒に住まずに民家に隠れていてソ連軍への連行は免れていましたが、その後ソ連兵に見付かり殺された事件もありました。収容所内で病気が多発したので、伝染するのを恐れ収容所から離れた所で生活しようと思ったことが、逃亡して潜んでいると見られ死を招く結果になってしまったの

を着せませんが、満人はこのことを知っていて遺体を掘り返し衣服をはぎ取りそのまま放置するので、狼や野犬が遺体を食い散らす有様は見ても無惨な光景でした。

戦後慰霊の旅で現地を訪れ、供養のあと土を持ち帰った同じ団の人もいましたが、だれ訪れることもなく異国の土に眠る幼い我が子を哀れに思いながら、埋葬した場所さえ今は定かでなく訪問も叶いませんでした。一度訪ねて心から冥福を祈り、六十年間慰霊に行かなかったことを詫びたいと思っ

ています。
長男が亡くなってから、思い感^{まじ}つた末に決断して、私たちの結婚記念日であった十二月十六日に髪を切り男の姿に変装しました。幼い子供を背負っていけば、ソ連兵に襲われることはないけれど、女一人だけの身になると危険が伴うので、これを避けるためでした。

年を越し、昭和二十一年二月初めにチチハルに移りました。北学田でほかの開拓団と合流したた

使つての縫製作業で八路軍の軍服を作りました。

このころには、八路軍と中央軍との間で内線が繰り広げられていました。そのうち日本人会の紹介で、仲間の女性十人と、チチハルから二百キロメートル南にある白城子という街の紡績工場へ仕事に行きました。これも八路軍の徴用指示によるものでした。北学田やチチハルより南だから、間もなく日本に帰れるのではないかと、皆大喜びで行くことに同意したのです。

日本人が経営していた大きな工場をそのまま接収したもので、よそから解体して運んできた機械や部品を組み立てたり、磨いたりする仕事でした。普通なら男性のする仕事なのに女性を使うとは思いませんでしたが、当時は絶対的な労働力不足だったのです。間もなく工場は操業を開始しましたが、日本人技術者が五、六人で大勢の満人労働者に紡績技術を指導していました。

ここで三カ月くらい働き、次いで私たち夫婦が最初に所帯を持った、訥河の街からさらに北方七

め、食糧などが調達しにくくなってきたので移動することになったのです。南英開拓団の仲間は十五、六人に減っていて、中には病気で臥せっている人もいました。この人たちは、はってでも一緒に行きたいと泣いて訴えていましたが、結局残され、後に満人の世話になり残留婦人になったり、中には死亡した人もいました。仲間を残していくのは本当に忍びなく、涙の別れでした。

チチハルでは、まだ百貨店や商店が営業していましたが、街頭できれいな着物や衣類を売っている日本人もいました。チチハルの街で、下学田にいたとき「お風呂に入り来なさい」と親切に世話をしてくれたおじさんと出会ったことがあり、「皆さんどうしていますか？」と尋ねたら「皆死んで一人になったよ」と悲しそうに答えられました。

私たちはすぐ八路軍の管轄下で働きましたが、食糧は配給され、病気になるっても医者がいるから安心でした。最初は被服所に配属され、ミシンを

十キロメートルぐらいにある嫩江という所へ移りましたが、今度の移動もまた八路軍の指示に従うものでした。白城子から嫩江まで四百キロメートルの移動は、八路軍の護衛なのか監視なのか分かりませんが、八路軍の兵士と一緒に、指定された列車、車、最後は馬車を乗り継いで、四、五日がかりの旅でした。

私たちは、最初日本人会から嫩江行きの話があったときには、行きたくないと断りました。それは皆が南へ南へと向かうのに、北の国境近くの嫩江に行くのは嫌ですと言いましたが、日本人会では「あなたたちを残して、我々が先に日本に帰るようなことは絶対にしない。責任を持って約束する。引揚げが始まれば、一番先に帰国させるから」と言うのです。チチハルの日本人難民収容所は八路軍の管轄下にあるため、日本人会も徴用指示を無視できず、是非とも承諾してほしいと説得されて、私たちはやむなく嫩江行きを承知して三十人

で出発しました。

白城子のときと同じような仕事で、ここにも日本人技術者と若い日本人の娘さんたちがいて、満人に糸の紡ぎ方、織り方を教えていました。八路军の軍属のようなもので食べることに心配はなく、給料も等級があり働き方で格差を付けて支給され、医師も日本人でしたから医療面でも安心でした。避難民という環境の中で独り身であつてこんな生活をしていて良いのだろうかと思ひ、その反面日本に帰りたいたいという気持ちもありながら、生活も治安も安心できる気楽な生活でした。私はこれまでと違つて個人的に仕事を探すのではなく日本人会から紹介されて行つたので、危険はなく給料もきちんと頂ける所で安心でした。

千チハルの日本人会には四、五十人ほど職員が働いており、避難して来る人たちの収容場所を指示したり、お世話をしていました。ハルビンや新京、奉天など大都市には、在留日本人や、特に北満から避難して来る開拓民の安全のため働いたそうです。特に開拓民救援のために、「満拓」の人た

り、さらに四人が嫩江に残り無事に引揚げの途についたのは、わずか六人に減つていました。嫩江には日本人技術者や医師などが残されましたが、本人の希望で残留したのではなくて、八路军による「留用」という名目で、戦後十年近くも帰国が許可されなかつたそうですが、生活や給与等の面は特段に優遇されていたとのこと。

いよいよ帰国の旅が始まり、一カ月もかかりチハル、ハルビン、新京と汽車を乗り継ぎ乗り換えて、乗船地葫蘆島^{コロトウ}を目指しました。内戦があつたため、途中では鉄道線路が外されていて歩いた所もあり、また鉄橋が爆破されて汽車が通れずに船で渡つた所もあり、随分と苦労しましたが、八路军の兵士が、途中ハルビンまでだったか新京までだったかよく覚えていませんが護送してくれたので、食べ物や襲われる心配もなかつたのは幸いでした。

葫蘆島の手前、錦州の収容所で引揚者のために炊き出しがあり、炊事当番に出ました。大きな兵

ちが献身的な救済や医療活動をされたと聞いております。

嫩江には、日本軍隊の大きな兵舎がありました。終戦と共に、ここにいた兵隊は兵器や食糧を持ち興安嶺の山中に逃げ込み、ソ連軍の捕虜になれば殺されると思ひ込み隠れていましたが、ひと冬越して食糧が欠乏し街に探しに出てきたところを、ソ連兵に捕らえられて連行されるのを見たことがあります。その姿があまりにも惨めで、この人たちが関東軍の兵士だったのかと思うと、気の毒で涙しました。この人たちはシベリアに送られたとのことです。

引揚げの状況

九月に入つて、日本人会から待ちに待つた連絡が届きました。この紡績工場で引き揚げるまで働いたので、お金も結構蓄えができました。引揚げが始まつてから、嫩江を離れるようにという指示がありました。南英開拓団を退避したときに四十六人だった仲間は避難の途中で散り散りにな

るに、千人以上の人が収容されていたと思ひます。何日もの乗船待ちの間には演芸会が開かれて、嫩江から一緒に来た鹿兒島出身の娘さんたちの踊りなどが披露されました。しばらくして、乗船のため葫蘆島に着きましたが、そこでも一週間ばかり待たされようやく乗船。引揚船はアメリカの「ブイゼル号」という貨物船でした。九月末に出港、三日ほど船の中で過ごし、九州博多港に着きました。

下学田でソ連軍に連行される主人が、「これから先は絶対に個人行動をとるな。必ず大勢の人と集団で行動するように」という言葉を残してくれました。私は引揚船に乗るまで、この言葉をしっかりと守つてきました。そして、何よりも健康だったから無事帰国できたと思つています。千チハルに避難していたとき、健康診断で「発疹チフスにかかったことがあるようだ、気を付けなさいと駄目ですよ」と医師に言われましたが、自分自身では何の自覚症状もなく、用心のため少し欠勤し

て済ませたほど体は丈夫でした。それでも、私は子供一人を背負つての避難行動が大変だったことを思うと、五、六人の幼い子供を連れていた母親にとつては、死ぬよりもつらい苦労だったろうと察するものです。

帰国、その後の状況

博多から懐かしい故郷へ向かいました。途中、海の下に掘られた関門トンネルを初めて通つて、主人の実家に着いたのは十月六日でした。私の実家も近くでしたが、いったん嫁に出た身であり、先に主人の両親の所に落ち着きました。それから、農業を手伝いながら嫁として義理堅く勤め、主人の帰りを待ちました。

主人は昭和二十三年五月にシベリアから無事復員しましたが、舞鶴港に上陸したとき引揚援護局の人から北海道開拓の話聞いたといつて、落ち着くと早速長野県庁に向きました。そこで、北海道根室原野別海町に長野県から入植しているお二人を教えられ、弥栄村開拓団引揚者の田中岩太

郎さんと塩原松茂さんであることを知り、すぐに田中さんに入植希望の手紙を送りました。主人の親も私の父も「長野を離れて何故北海道に行くのか」と反対しましたが、私も内地では暮らしたくなかったのです。村の同級生の中にはまだ嫁いでいない人がたくさんいて、集まりなどで私は引揚げ前に髪を切った坊主頭を見られるのは恥ずかしかつたのです。

間もなく田中さんから入植賛成の返事が届き、復員二カ月後の七月渡道して入植しました。今でこそ釧路、根室と聞けば酪農主産地として有名になりましたが、その当時は未開地の原野、不毛の地として作物の育たない所と言われていました。

終戦後三年、まだ食糧事情のはなはだ悪い時代であり、特に釧路地方は冷涼で稲作のできない所でしたから、米はなかなか口に入らず、常食は雑穀、馬鈴薯、山野草などでお腹を満たしておりました。また、住まいは原野の中に仮小屋を建て雨露を凌ぐ程度の生活で、衣食住に不自由しながら、

荒れ地の開墾に一心不乱に働きました。昭和二十九年に、北海道庁の貸付牛制度で初めて乳牛を導入しましたが、搾乳するようになってからも近くに集乳施設がなく、地元のできるまで数キロメートル離れた弥栄開拓農協の集乳所に持ち込みました。

やがて、十頭搾乳すれば安定した経営ができると言われる時代になりましたが、昭和三十四年に主人が病気で入院し、経営は一時停滞しました。入院中は私一人では手が回らず、隣近所の皆さんの協力支援を頂き、一年後の退院まで何とか持ちこたえることができました。

昭和四十年から五十年代に掛けて、酪農も国際化、近代化に対応するため規模拡大を迫られ、飼育頭数を増やさなければならず、これに追いつけずやむなく離農する農家も増加しました。幸いにも、我が家は息子が跡を継ぎ酪農経営を継続することができましたが、規模が大きくなるに従って労働力不足に苦勞しました。それを解消するため、平成十五（二〇〇三）年に大型搾乳施設（ロータ

リーパーラ）を建設し、収益を増やすことを目指して頑張っているところです。

主人も私も、満州で果たせなかつた夢を今度こそ北海道で実現したい、そのためにはどんな苦勞も引揚げのときを思えば、と辛抱して五十六年が過ぎ、今ようやく大型酪農経営に踏み出したところです。現在の経営は土地百二十三町歩、乳牛飼育頭数二百五十頭、主人と私はまだ共に現役で、息子たちと一緒に働き暮らせることが何よりも幸せです。

引揚げ労苦を回想して

三年前 今日を記念の高島田

吾子ゆきし 背子の帰りもたのみなし 黒髪たちて操守らん

毒をあふりて友は狂いぬ